No. 1119

寝たきり老人ホーム開園

― 東京・青梅 ―

このほど東京都青梅市に、盲目の寝たきり老人を中心に収容する特別養護老人ホーム・富士見園が開園しました。
開園式には秩父宮妃殿下も御出席「かねてから熱望されておりました寝たきり老人のための老人ホーム富士見園が、ここに立派に完成されましたことは喜びでございます。目の不自由なおとしよりにとって、どんなにか喜びだろうと思います」とあいさつされました。富士見園を見学された妃殿下は、「空気がきれいで良い所ですネ、ご安心なさい、こんな良いところができましたから、どうぞ元気を出してネ」と老人ひとり、ひとりにおことばをかけられ、励まされました。
青梅市が3億7千万円を投じた明かるく近代的な施設は、盲目の老人のために色々な配慮がなされています。月額10万円を超える入園費は全額国庫負担、定員50名のうち、すでに63才から92才までの老人41名が入園し、快適な毎日を過しています。

版画でつづる民話

まだこんもりとした木立が残る東京都下東村山市秋津町は民話の宝庫である。竹やぶや神社にまつわる民話が数多くある。が都市化の波は今この民話の故郷を消し去ろうとしている。
この地に300年続く旧家に生れ育った池田宗弘さん（35）は彫刻家として忙しい毎日を送っている。自然に恵まれた秋津町周辺のスケッチは彼の楽しみの一つである。子供の頃よく遊んだ氷川神社のスケッチをしている時、ふと昔と違っていることに気がついた。彼が木登りした大きな木はもう、そこにはなかった。たまらない寂しさを感じた彼はこの時、伝説や民話を版画にして残そうと決心した。
一つの物語を五コマの絵にする。民話独特の雰囲気を出すためにどのような版画にするか、頭を悩ます時でもある。
民話のとりこになった奥さんも手伝ってくれる。
窓の光が辺りにこぼれる。するどい彫刻刀の先から民話の一つ一つが刻み込まれていく。
消えつつあった民話が、版画としてよみがえってきた。

「カッパのわび証文」

南秋津と北秋津の境にある持明院の曼陀羅堂の下側は曼陀羅ケ渕と呼ばれて河童が住みついていたと言われています。そして河で泳いでいる子供の生き肝を抜きとっては仲間の伊草の……

今第3話までできた。来年の春には美しい版画でつづられた民話絵本ができあがっていることだろう。